

A Japanese Translation of the “Christian Faith” Homilies of Wulfstan (2)

---

試訳 ウルフスタンの「キリスト教信仰」説教（2）

---

和田 忍  
市川 誠

## 試訳 ウルフスタンの「キリスト教信仰」説教（2）

外国語共通教育センター 和田 忍（東京都市大学）  
市川 誠（東京理科大学）

### 1. はじめに

本稿は、後期古英語期の散文作家ウルフスタン (Wulfstan 生年不詳 -1023年没) の「キリスト教信仰」(Christian Faith) 説教の日本語訳の後編である。本稿で扱う作品は、以下の通りである。各作品の右に記したページは、本稿が底本とする Bethurum の *The Homilies of Wulfstan* (1957) のページである。なお、全編ラテン語の作品である *De Christianitate* (Bethurum pp.194-199) は、「キリスト教的な生活」(The Christian Life)と内容が重複するため、本稿の対象の範囲外とする。

- (1) Gifts of the Holy Spirit (pp. 185-91)
- (2) A Rule for Canons (pp. 192-3)
- (3) The Christian Life (pp. 200-10)
- (4) Isaiah on the Punishment for Sin (pp. 211-20)
- (5) The False Gods (pp. 221-4)

拙訳を提示する前に、Bethurum の説明に基づき、本稿で扱う「キリスト教信仰」説教の各作品の概要を述べる。前稿「試訳 ウルフスタンの「キリスト教信仰」説教（1）」で触れたように、ウルフスタンの「キリスト教信仰」説教は、キリスト教信仰の基礎となる概念を聴衆の自国語である古英語で説明するために書かれたものである。「聖霊の恩寵」(Gifts of the Holy Spirit) は、7つの美德と7つの悪徳のラテン語とそれに対応する古英語を列挙する。

Bethurum によれば、この作品はエルフリッチ (Ælfric) の *De Septiformi Spiritu* (Napier ed. pp. 56-60) を改変したものである。「修道会士の規則」(A Rule for Canons) は、メスのアマラリウス (Amalarius of Metz) の『修道会士の規則』(*De Regula Canonicorum*) 第 45 章の翻訳である。この作品で、修道僧が遵守すべき規則が簡潔に示されている。「キリスト教的生活」(The Christian Life) は、前述の *De Christianitate* の古英語訳である。この作品で、ウルフスタンはキリスト教徒が守るべき生活上の教義を自国語で聴衆に説明する。「罪の罰に対するイザヤの預言」(Isaiah on the Punishment for Sin) は、2つの部分から構成される作品である。前半は、神に背いたユダヤの民の罪とそれに対する罰についての「イザヤ書」と「エレミア書」のラテン語の引用であり、後半は古英語による説明である。「キリスト教信仰」説教の最後の作品である「異教の神々」(The False Gods) は、「聖霊の恩寵」と同じく、ウルフスタンによるエルフリッチの作品の改変である。「異教の神々」はブラガのマルチヌス (Martin of Braga) によって書かれた『野蛮人への叱責』(*De Correctione Rusticorum*) に触発されてエルフリッチが書いたといわれている。ウルフスタンは改変の際に、強調の副詞、類義語などを多用し、アルフリッチの作品をウルフスタン特有の文体と言語で書き換えている。また「異教の神々」は、同じくエルフリッチの作品である「呪術」(*De Augriis*) とともに 14 世紀頃古アイスランド語に翻訳され、「ハウク本」(Hauksbók) に収録されている (詳しくは Frankis (2016) を参照のこと)。

次節以降で、「キリスト教信仰」説教の各作品の日本語訳を提示する。なお、Bethurum の刊行本では斜体で示される聖書の引用箇所の日本語訳は、前稿と同じく、共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳 旧約聖書続編つき』に従う。また、ラテン語の扱いについて、「聖霊の恩寵」の冒頭 17 行のラテン語は重複を避けるために省略した。他方、「罪の罰に対するイザヤの預言」の冒頭 4 ページに及ぶラテン語は、聖書からの引用であり、内容の観点から重要であると判断し、翻訳に含めた。

## 2. 聖霊の恩寵

(Bethurum p. 185) 7つの聖霊の恩寵について。預言者イザヤは、彼の預言の中で、聖霊とその7つの恩寵について書いた。7つの恩寵の名称は以下の通りである。ラテン語のサピエンキアは、すなわち、英語で「知恵」である。ラテン語のインテレクトゥスは、英語で「理解」、ラテン語のコンシリウムは、すなわち、英語で「助言」である。ラテン語のフォルティトゥードは英語で「心の強さ」である。ラテン語のスキエンティアは、英語で「良き理解」である。ラテン語のピエタスは英語で「敬虔」である。ラテン語のティモール・ドミニは、英語で「神の畏れ」である。この7つの恩寵は、(p. 186) 確かに、私たちの主においては完全なものであり、聖霊は、能力と心の熱心さに応じ、司教が、司教区で熱心に神自らに懇願するように、キリスト教徒に日々それらを施すのである。

確かに、賢く生き、どうすれば神の気に召すことができるかを常に考える人は、神の恩寵を通して、知恵を持つ。善行で常に主の意志に向かう人は、神の恩寵を通して、良い理解を持つ。何をを行い、何を避けるべきかを常に考える人は、神の恩寵を通して、良き助言を持つ。大いに耐えることができ、すべての苦しみで常に忍耐強く、その後、幸運にも決然さを捨てず、あらゆる方法で信仰に育てられ、その結果、喜びで喜び過ぎず、苦しみで絶望し過ぎない人は、神の恩寵を通して、心の強さを持つ。善良と簡潔を愛し、外見よりも内面が良く、真実と虚偽の区別を知る人は、神の恩寵を通して、良き理解を持つ。敬虔であり、他人、同等の人や目下の人に対し節度を知り、他人を言葉や行為で軽蔑し、侮辱することのない人は、神の恩寵を通して、敬虔さを持つ。それから、聖なる恩寵の7番目のそれである「神の畏れ」があり、その恩寵はすべての知恵の始まりである。神の畏れを十分に持つ人は、魂が必要とする、持つべきものの多くを捨てることはない。この7つの恩寵がない人は、神にふさわしくなく、神に属することなく、最期の時の前に、より良い行いを得て、神の御心を行わない限り、決して、神の前に栄えることはない。

それに対して、悪霊や見えない悪魔は7つの悪徳を持つ。すなわち、多くの人にとって害であり、あらゆる点で、上で述べたこの有益な神の恩寵に対

立するものである。それらを、彼は (p. 187) 不幸にも彼に従い、神の恩寵を気に留めず、神に対して畏れを抱かず、神の律法を守らず、欲望と無益な意志に従う人たちに日々施すのである。これらの邪悪な悪魔の悪徳は、ラテン語では次のように呼ばれる。インシペテンティア、すなわち、「軽率」、ストゥルティティア、すなわち、「愚かさ」、インプロヴィデンティア、すなわち、「無知」や「弱さ」、イグノランティア、すなわち、「無知」、インピエタス、すなわち、「邪悪」、テメリタス、すなわち、「横柄」である。すべての正しい知恵は神から生まれた。なぜなら、神自らが真の知恵であり、神自らの恩寵から来る知恵を持ち、それを通して、知恵で自身の人生を飾る人は幸いである。その知恵とは、私たちが前に述べたように、聖霊の恩寵であり、それに対し、悪魔は、悪知恵と欺きを撒き、それゆえ、不幸な人は、知恵に気を留めず、賢明に人生を取り戻らず、それにもかかわらず、さらに悪いことに、自らを注意深く、賢明である見なし、また、非常にしばし、賢い人であるかのように偽り、知恵ではなくむしろ欺きに考えを巡らしているのである。神自らの恩寵に由来する知性に対し、悪魔は理解の欠如を撒き散らし、さらに悪いことを行う。すなわち、知恵や善を少しも知らない人に理解力があるようなふりをさせるのである。神自らの恩寵に由来する賢明な知恵に対し、敵対する悪魔は不注意を撒き散らし、さらに悪いことを行う。すなわち、理性を以て知恵に気を留めない人に賢いふりをさせるのである。(p. 188) 神自らの恩寵に由来する心の確かさと強さに対し、邪悪な悪魔は弱さと邪悪な臆病を送り、その結果、人は困った時に怯え、さらに悪いことを行う。すなわち、心の中に勇敢さを持たない人に力強く恐れを知らないふりをさせるのである。神自らの恩寵に由来する理解と知恵に対し、敵意ある悪魔は無知を撒き散らし、送る。さらに悪いことに、理性の意味を知らない人に対し、深い知恵があるかのように振る舞わせる。神自らの恩寵に由来する美德に対し、悪魔は邪悪を撒き散らし、送り、そのように教えられるので、不幸な人は、ふさわしい場所ではどこでも称えられることはなく、目下や同等の人に節度を見出すことはない。悪魔はさらに悪いことを教える。すなわち、美德を持つふりをして欺き、偽りの姿で大いに傷つけるのである。神自らの恩寵に由来する素直な神の畏れに対し、恐ろしい悪魔は傲慢さを教え、不用意な人を言葉と行為の不安定さに導き、時には、さらに悪いことに、神

に対する畏れを持つかのように振る舞わせ、(p. 189) 彼らの考えは、すべては邪悪さで汚されるだろう。

偽りの悪よりも神に嫌悪される悪はない。なぜなら、悪魔自らがそれを定め、しばし最初は全く良く思われ、その後、結局は全く悪く、苦いものとなるものを見せるからである。しかし、非常に多くの人が、悪魔を通してそのような欺きに惑わされ、その結果、あることを語りながらも、別のことを考えるふりをするのである。それに留まる人は偽善者である。確かに、すべての悪徳によって、哀れな人であるアンチ・キリストは汚されている。彼の言葉と行為は不注意な人に良く思われるが、それらはすべて邪悪で狡猾である。しかし、欺く人がそのように振る舞うので、公の敵から自らを守る術をほとんどの人は知らない。なぜなら、この世で、彼よりも言葉が賢く、心が邪悪で、狡猾で欺瞞的な人はいないからである。また、この欺瞞的な世界では、偽善を通して、話すことと考えることが違う余りに多くの人がいる。狡猾に他の人を欺くことができることを、彼らは思慮と見なす。しかし、彼らはそのように考えず、狡猾な行為で自身と多くの人を傷つけているけれども、そのすべては悪魔に由来する。(p. 190) そのように友好的に欺く詐称者は、しばし不正に、それによって神と世の前で人を傷つける、彼らはそのように考えないが、彼の道を開く伝令、アンチ・キリストの奴隷である。

全能のキリストは、熱心に真実と素直、あらゆる人が罪深い欲望に強く抵抗するよう教えた。アンチ・キリストは、虚偽と欺瞞、あらゆる人が自らの欲望に従うよう教える。そのような誤った教えで、彼は全く余りに多くの人を誤らせた。それを思慮と考える大ほら吹きは、狡猾に欺き、虚偽で真実を克服させ、無知にも欲望に従う生活し、過度に気に留めることもなく、書物が述べるように、肉欲の節制を持たないことを許す。彼らは言う。すぐさま他の人を考え、頻繁に不注意な人について何かを語る人は、思慮が最も注意深く賢明である。また、愚かな人は、偉大な節制に少しも気を留めず、食べ物、人が享受するため、女性は望む人にとっては姦淫のために作られたと言う。私の言うことは真実である。そのような教えで、アンチ・キリストは全く余りに多くの人を満足させ、憎らしげに教えるのである。なぜなら、(p. 191) 自らの欲望に従い、欲望を法として定めるより悪い法はこの世にはないからである。この世の終わりに近づけば近づくほど、罪深い欲望や罪の

ある行為が、悪魔の危害と誤った教えで、ますます人にありふれたものとなる。何事にも自らを戒める人は幸いである。神が私たちを助けますように。主の名が祝福されますように。

### 3. 修道会士の規則

(p. 192) 旧約聖書また新約聖書は、私たちに次のように教え、戒める。すべての心と力で、第一に神を愛し、崇めること。その後、自身と同じく、隣人を愛し、保つこと。もし、これがすべてのキリスト教徒に命じられれば、確かに、日々、神に仕えるべき聖別された人がそれを最も熱心を守るべきである。なぜなら、すべての神聖な律法と預言者のことばが、この2つの命令に属しているからである。聖別された人は、あらゆる正しさを愛し、あらゆる不正を避けなければならない。彼らは、決して、殺人者、欺瞞者、偽証者、殺人者、姦淫者になってはならない。彼らは、自らの正しい婚姻、すなわち、修道院を守らなければならない。彼らは、欺瞞者、裏切り者、強盗、略奪者になってはならない。彼らは、自らに提供されることを望むこと以外は誰にも提供してはならない。彼らは、傲ったり、怒ったり、酩酊してはならない。彼らは、決して、悪徳に陥ってはならない。虚偽、詐欺、金銭の獲得から自らを戒めなければならない。できるだけ紛争を避けなければならない。他の人が争いを始める場合、熱心に調停しなければならない。正しく、清く、節度と名誉を保ち、生活をしなければならない。熱心に通夜と断食を愛し、手厚く歓待し、慈悲深くなければならない。神の貧者に食物と衣服を与え、病人を訪ね、死者を埋葬しなければならない。できるなら、すべての人に対して常に平和と和解を持たなければならない。目上に対して大胆で頑固になってはならない。常に偉大な裁きを恐れ、熱心に神に仕えなければならない。頻繁に聖書を読み、熱心に祈りを行い、常に讃美歌で神を称え、善行で神の意志に自らを委ねなければならない。寮と一緒に休息を取らなければならない。(p.193) 同じ食堂で一緒に食事をし、全員で決められた時間に教会を訪ね、そこで、神の称えとして、時祷を行い、神のしもべが教会で全能の神を称え、崇める時、常に天の御使が側にいることを、熱心に理解しなければならない。できるだけ、常に女性の存在を避けなければならない。な

ぜなら、しばし、欲望が、強く堅固な人の心を打ち負かすからである。また、長が許すより長い時間、修道院から離れないよう熱心に戒めなければならない。修道院の中で無為に過ごしてはならない。長の指導に従い、神の務めまたは有益な仕事に従事しなければならない。緩慢さによって、使徒が定めた裁きを受けないためである。使徒は次のように言った。「働きたくない者は、食べてはならない」(テサロニケの信徒への手紙第3章10節)。すなわち、有益であることを望まない人は、いかなる善も享受してはならない。年長の修道僧は年少の修道僧を愛し、熱心に教えなければならない。年少の修道僧は、熱心に年長の修道僧に従わなければならない。教養のある人は教養のない人を蔑まず、熱心に教えなければならない。高貴な生まれの人は卑しい生まれの人に報いを与えずに、各人が互いに常に週の奉仕で熱心に仕えなければならない。食堂では、読師を除き修道僧は常に沈黙しなければならない。もし誰かが罪を犯せば、熱心に彼は戒められ、咎められ、若い人なら、鞭を打たなければならない。修道僧の生活は、特殊な技能を知るのではなく、修道院での技術を熱心に実践し、それによって、彼らは生活の糧と、また神から永遠の報いを受けるのである。もし彼らが規則に基づく生活をし、それに値することを望むのなら、修道僧は、このように修道院で生活をしなければならない。私たちは、彼らが頻繁にこの小さな戒めを読み、熟慮し、心の中で固く閉じ、神の助けを通し、できるだけ実践するよう教える。そうすれば、彼らは人からは称えを、神からは永遠の報いを得るのである。

#### 4. キリスト教的生活

(p. 200) ここにキリスト教について始まる。親愛なる人たちよ。キリスト教の意義を知ること、キリスト教を正しく守ることは、すべてのキリスト教徒にとって大いに必要である。キリスト自らの名前にちなみ、キリスト教徒と名付けられる。なぜなら、キリストは、キリスト教徒の頭であり、もしキリスト教を正しく守るのなら、すべてのキリスト教徒はキリスト教の手足として見なされる。しかし、キリスト教の行為を除き、キリストの名前は少しも役に立たないが、使徒が言ったように、キリストの教えと彼の律法に従う人は、正しいキリスト教徒である。「[キリスト]の内にもいつもいると言う人



は、彼が歩かれたように、自らも歩まなければなりません」(ヨハネの手紙第2章第6節)。キリストを信じるといふ人は、キリスト自らが進んだ正しい道を行きなさい。キリストを正しく信じながら、彼の教えと律法に従わないというのなら、その人は自らを欺く人である。また、キリスト自らは福音書のなかで次のように明らかに語った。「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」(ヨハネによる福音書第14章第15節)。「もし、あなたがたが私を愛していれば」彼は言った。「私の教えに従いなさい。なぜなら、私の教えに正しく従わない人は、私を愛さないからである」。(p.201) さて、キリスト教徒である私たちは、熱心に彼の教えと法に従う必要がある。

親愛なる人たちよ。かつて神自らは大きな声でシナイ山から指導者モーセとイスラエルの民に語り、彼自らと彼の律法について次のように言った。「わたしは主、あなたの神である」など(出エジプト記第20章第2節)。「私はあなたをエジプトから導いた主である」彼は言った。「外国の神々を崇めるな。あなたの主の名前を無益に唱えるな。熱心に安息日を祝うことを知りなさい。熱心に父と母を敬いなさい。殺人者になってはならない。姦淫で自らを汚してはならない。盗みをしてはならない。他人の妻や他人が所有する物を求めてはならない。不正を求めてはならない。これら十の戒律を神は定め、書き、モーセに託した。キリストはその後、それらを福音書で明らかにした(マタイによる福音書第19章第18-19節)。彼はまた熱心に、各人は提供してもらいたいことを提供すべきと教えた。それが正しい律法であり、その律法を守る人は幸いである。福音書が頻繁に私たちに教えるように、必要に応じて、もし私たちが正しく神に従うことを望むなら、これらの命令と他の多くを私たちが守らなければならない。また、洗礼を受けた時、私たちと私たちの庇護者が約束したすべてを実行しなければならない。

ああ、親愛なる人たちよ。何よりも神を愛し、熱心に彼の教えと律法に従い、常に彼の聖なる教会を崇める必要がある。(p.202) 私たちすべてには、一人の天の父とエクレーシア(教会)と呼ばれる一人の聖なる母がいる。それは、神の教会であり、私たちは常に彼女を愛し、崇めなければならず、決して、言葉と行為で彼女を傷つけてはならず、常に、彼女に庇護を与え、常に、彼女を汚れなく守らなければならない。ああ、キリスト教は教会の迫害

者にとって何の役に立つのか？なぜなら、神の敵であるすべては、神の教会の敵であり、神の教会の権利を小さくし、また、損ねるのである。恐ろしくも、そのことについて、グレゴリウスは語った。「もし誰かが神の教会を略奪するまた聖域を侵犯するなら、呪いがある。それに対して、すべての人は答えて言った。アーメン」。「神の教会を略奪する人は」、彼は言った。「神聖さを傷つける人は、常に滅びるように。そして、ローマの賢人は彼にすぐさま答えて、すべての人が異口同音に言った。アーメン」。すなわち、英語で「かくありますように」。

ああ、できるだけ熱心にキリスト自らに倣い、キリストの教会を崇め、守り、また熱心に聖霊が教えるようにすることは、キリスト教徒にとってまさにふさわしい。すなわち、誰かが熱心に不正を避け、心から、神と世の前に、正しさに向かうことである。ああ、どのようにして、最も容易に悪と不正から離れることができるだろうか？ (p.203) 熱心に悪魔を避け、彼の邪悪な教えを蔑み、熱心に彼の悪い教えから身を守り、日夜、常に悪魔の8つの悪徳、すなわち、貪欲、大食、軽薄、怒り、悲しみ、怠惰、傲慢、そして高慢から自らを戒めない限り。この8つの悪魔の力から、すべての悪徳が生じ、その後、広く拡散した。それから、8つの崇高な美徳が、神の力を通して人に与えられた。すなわち、寛大、清純、純潔、柔和、喜び、堅固、友情、そして謙虚である。この美徳を以て、私たちは自らを守り、神の助けを通して、悪魔に打ち勝ち、確固として、彼の悪徳に対抗しなければならない。親愛なる人たちよ。私たちの主は、かつてモーセに語った。貪欲についてこのように言った。「隣人の家を欲してはならない」(出エジプト記第20章第17節)。「他人が所有するものをあなたは不正に求めてはならない」。彼は言った。そして、使徒は言った。「金銭の欲は、すべての悪の根です」(テモテへの第1の手紙第6章第10節)。「貪欲はあらゆる悪の根である」と彼は言った。親愛なる人たちよ。私が教えるように行いなさい。常に、熱心に貪欲から身を守り、また、常に、熱心に強欲に対して戒めなさい。強欲のため、(p.204) アダムは最初に樂園を失った。また、私は熱心に各人に教える。常に、汚れた姦淫で自らを汚してはならない。心の中で、余りに長く怒りを保ってはならない。世俗の心配で悲しみ過ぎず、主に希望を持ちなさい。頻繁に無益を愛し過ぎてはならない。無益な称賛と虚栄心を愛しすぎてはなら

ない。高慢を愛さず、常にそれを避けなさい。常に、熱心に殺人から身を守りなさい。肉欲と姦淫から身を守りなさい。他の不正な収入から熱心に身を守り、正しく得なさい。熱心に不正な測りと重さを捨て、常に他の人に対して欺瞞になってはならない。他の人を窮屈に束縛し、不正に仕えてはならない。略奪をしてはならない。不正に他の人を非難してはならない。他の人をうんざりさせず、過度に侮辱してはならない。邪悪に偽証をしてはならない。偽証者を立ててはならない。恥ずべき仕方で罵り、軽蔑して神を激怒させることに慣れてはならない。(p.205) 笑い過ぎず、突然、喜び過ぎず、その後、高慢になり過ぎてはならない。他の人を陰で責め、非難し過ぎてはならない。心の中に固く嫉妬を抱き過ぎてはならない。他の人を憎み過ぎてはならない。邪悪なことばで罵ってはならない。過度に論争好きになってはならない。飲酒や過剰を愛してはならない。動物の肉を食べ、血を飲んでではない。魔法を行ってはならない。偶像を崇拜してはならない。仲間を追放してはならない。日曜の祝祭を無視してはならない。十分の一税を正しく実行しなさい。祝日と断食を熱心に守りなさい。神に約束したことを決して否定してはならない。告白しない肉欲で、聖餐を食してはならない。聖餐を食する前には、告白し、贖いなさい。また、私は熱心に各人に教える。頻繁に罪を告白し、悔悟で自らを清めなさい。(p.206) 司教から祝福と慈悲を求めなさい。それ故、望む人は理解しなさい。福音書が言うように、そのすべてが大いに役に立つのである。「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタイによる福音書第3章第1節)。あなたがたの罪を悔い改めよ。あなたがたにすぐに天の国が開かれる。

親愛なる人たちよ。熱心に、私は教える。悪と不正から離れ、常に、長ければ長いほど、さらなる善行を行いなさい。熱心に、神の律法に気を留めなさい。しっかりと律法を守りなさい。頻繁に1年間、聖餐に備えなさい。ああ、親愛なる人たちよ。遅れることなく、急いで神へ向かいなさい。他の人の財産に貪欲な人は、自らの財産を施す人になりなさい。貪欲な人は清らかになりなさい。汚い姦淫に淫らな人は、自らの魂を清める人になりなさい。怒れる人は忍耐強くなりなさい。悲しむ人は喜びなさい。怠惰な人は勤勉な人になりなさい。(p.207) 無益な名誉を求める人は、どのようにして主の気に召すか注意しなさい。高慢な人は謙虚になりなさい。盗む人は正しい労働

に努めなさい。眠気を催す人は用心深くなりなさい。全く緩慢な人は頻繁に自らの必要のために教会に行きなさい。欺瞞を言う人は真実を言いなさい。陰口を言う人はことばに用心しなさい。愚かに話す人はことばに慎重になりなさい。不正に従事する人は常に聖なる祈りに従事しなさい。正しい信仰に不実な人は、聖なる信仰に忠実になりなさい。このように、各人は正しきで不正を償い、邪悪な種を根絶やしにし、良い種を育てるべきである。

さて、ああ、親愛なる人たちよ。熱心に信じなさい。聖なる三位一体は一つである、すなわち、父と子と慰めの聖霊であることを想起しなさい。3つの名前はすべて1つの聖なる力を含み、一人の永遠の神、支配者、すべての被造物の創造主は分かつことができない。何よりも、彼は愛され、崇められるべきである。すべてのキリスト教徒は他人を愛し、敬意を示し、自分が望むことを除き他人に申し出るべきでないということは正しい。(p.208) 他の人に陥れ、欺いてはならない。他の人を正しい信仰と共に保つべきである。また、私は各人に教える。常に、神に対する畏れを心に持ち、常に、神の家を崇め、守り、彼自らの必要として訪ねなければならない。熱心に平和と和解を愛し、常に恥ずべき狡猾を投げ捨て、常に異教を言葉と行為で蔑みなさい。熱心に神聖な教えに従い、心から頻繁にキリストに叫び、できるだけ、教会に光と供物で挨拶しなさい。喜んで正しい十分の一税を実行し、熱心に神の司教に耳を傾け、神の畏れのため、彼らを愛し、崇めなさい。主が言うように「あなたがたに耳を傾ける者は、私に耳を傾ける」(ルカによる福音書第10章第16節)。頻繁に施しを与え、食べ物や飲み物を飲める人に、飲み物を濁く人に、家をさまよう人に、衣服を裸の人に、慰めを悲しむ人に、訪問を病気に人に、墓を死んだ人に与えなさい。寡婦と孤児を守り、救い、熱心に貧者を助けなさい。確かに、国と法が働くように、熱心に裁きと命令を正しなさい。(p.209) 各人は常に正しく世俗の主の忠実かつ誠実であり、主人は部下に慈悲深くあるべきで、不正で彼らを苦しめてはならない。各人は心穏やかであり、神の畏れのために、傷つける場合は、慈悲を示しなさい。洗礼の庇護者はその子を愛し、教え、不正を正しなさい。年長者は「主の祈り」と「使徒信条」を想起し、年少者を正しい信仰で教えなさい。各人の心と口には正しいことばを置きなさい。心と行為で純潔さを愛しなさい。思考と美德で純潔を好みなさい。また、私は熱心に各人に教える。欲望に従わ

ず、自らの必要として、頻繁に禁欲で自らを律しなさい。私が教えるように行いなさい。年少者は熱心に年長者に従い、年長者は年少者を愛し、教えなさい。いのちの道を導くことができる人は、以前に道を誤った人を正しい道へ導きなさい。愚かな人を正しなさい。賢い人に耳を傾けなさい。常にそして熱心に、神聖な必要を心に留め、すべての心の希望を神自らに置きなさい。裁きの日を恐れ、地獄に怯え、熱心に永遠の休息を得なさい。日々常に、(p.210) 各人は罪を恐れ、常に最後の日が近いことを考えなさい。ああ、確かに、このことすべてを頻繁に考え、熱心に神の命令に注意し、十分に希望を持つ人はこの世で賢明であり幸いである。神と人に対して正しく真の愛を持ち、正しい悔悟で自らを清め、熱心に過去の行いを嘆く人である。なぜなら、預言者が言うように、神自らは、もし彼らが望むのなら、罪人に憐みを与えることを約束した。預言者は言った。「主を尋ね求めよ。見いだしうるときに」(イザヤ書第 55 章第 6 節)。同じく預言者は言った「悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて」(エゼキエル書第 18 章第 21 節)など。そして、主は福音書で言った。「神の天使たちの間に喜びがある」(ルカによる福音書第 15 章第 10 節)。

ああ、親愛なる人たちよ。急いで、熱心に私たちの生活を正し、予期しない時に滅びることがないように、遅れることがないようにしよう。言葉と行為における良い考えで自らを正しさに慣らし、神の助けと共に、生きている間、よく神に従い、彼の律法を守る人に用意されている喜びを得よう。常に、永遠の神に称えと誉れがありますように。アーメン。

## 5. 罪の罰に対するイザヤの預言

(p.211) ユダヤ人とエルサレムについて見た預言者イザヤの夢が始まる。その時代に預言者イザヤは言った。「天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた」(イザヤ書第 1 章第 2 節)「彼らは主を捨てイスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた」(イザヤ書第 1 章第 4 節)。主は言った「お前たちの地は荒廃し、町々は焼き払われ、田畑の実りは、お前たちの前で、異国の民が食い尽くした」(イザヤ書第 1 章第 7 節)。「どれほど祈りを繰り返して

も、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を」(イザヤ書第1章第15節)。これらを主、万軍の神は言った。「わたしを仰いで、救いを得よ」(イザヤ書第45章第22節)。

また、イザヤは言った。

「主に逆らう悪人は災いだ。彼らはその手の業に応じて報いを得る」(イザヤ書第3章第11節)。「わたしの民は、幼子に追い使われ」(イザヤ書第3章第12節)。「貧しい者から奪って家を満たした」(イザヤ書第3章第14節)これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「シオンの娘らは高慢で、首を伸ばして歩く。流し目を使い、気取って小股で歩き、足首の飾りを鳴らしている。(p.212) 主はシオンの娘らの頭をかさぶたで覆い、彼女らの額をあらわにされるだろう。その日には、主は飾られた美しさを奪われる。足首の飾り、額の飾り、三日月形の飾り、耳輪、腕輪など」(イザヤ書第3章第16-19節)。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ。家に家を連れ、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでにこの地を独り占めにしている」(イザヤ書第5章第8-9節)「私の耳にこれらがある」。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ。朝早くから濃い酒をあおり」(イザヤ書第5章第11節)「酒を飲むことにかけては勇者」(イザヤ書第5章第22節)「夜更けまでに酒に身を焼かれる者は」(イザヤ書第5章第11節)。「酒宴には豎琴、太鼓と笛をそろえている。だが、主の働きに目を留めない」(イザヤ書第5章第12節)「それゆえ、私の民はなすすべも知らぬまま捕らわれて行く」(イザヤ書第5章第13節)。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ、自分の目には知者であり、うぬぼれて、賢いと思う者は」(イザヤ書第5章第21節)「これらのものは賄賂を取って悪人を弁護し、正しい人の正しさを退ける」(イザヤ書第5章第23節) これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ。悪を善と言ひ、善を悪と言うものは。彼らは闇を光とし、光を闇とする」  
(イザヤ書第5章第20節) これらを主、万軍の神は言った。など。

(p.213) また、イザヤは言った。

「よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな」(イザヤ書第6章第9節)

また、イザヤは言った。

「この民の心をかたくなにし、耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく、その心で理解することなく、悔い改めていやされることのないために」。わたしは言った。「主よ、いつまででしょうか」。主は答えられた。「町々が崩れ去って、住む者もなく、家々には人影もなく、大地が荒廃して崩れ去るときまで」(イザヤ書第6章第10-11節)。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ。偽りの判決を下す者。労苦を負わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する」(イザヤ書第10章第1-2節)。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「災いだ。助けを求めてエジプトに下り、馬を支えとする者は、彼らは戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、イスラエルの聖なる方を仰がず、主を尋ね求めようとはしない」(イザヤ書第31章第1節)。これらを主、万軍の神は言った。など。

また、イザヤは言った。

「洗って、清くせよ。悪い行いをわたしの目の前から取り除け。悪を行うことをやめ、善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの権利を弁護せよ。論じ合おうではないか、と主は言われる」(イザヤ書第1章第16-18節)。

(p.214) エレミヤのことばが始まる。

「ヤコブの家よ。イスラエルの家のすべての部族よ。主の言葉を聞け」。主はこう言われる。「お前たちの先祖は私にどんなおちどがあったので遠く離れていったのか。彼らは空しいものの後をおい、空しいものになってしまった」(エレミヤ書第2章第4-5節)。主はこう言われる。「あなたの犯した悪が、あなたを懲らしめ、あなたの背信が、あなたを責めている。あなたの神である主を捨てたこと、彼への畏れがあなたにないことがいかに悪く、苦いことであるかを味わい知るがよいと」(エレミヤ書第2章第19節)。

また、預言者エレミヤは言った。

「背信の子らよ、立ち帰れ、と主は言われる」(エレミヤ書第3章第14節)。「さまざま道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ。どれが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ」(エレミヤ書第6章第16節)。



また、エレミヤは言った。

「主の言葉を聞け」。主はこう言われる。「お前たちの道と行いを正せ。私はお前たちをこの所に住まわせる」など（エレミヤ書第7章第3節）。「この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えた地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる」と全能の主は言われた（エレミヤ書第7章第5-7節）。

#### 預言者イザヤの夢について

書物には模範として多くの有益なものがある。自らの必要として望む人は気に留めよ。かつて、神の氣に召す一人の男がいた。(p.215) 預言者イザヤであり、その後起こったように、彼はユダヤの民に多くを預言した。神が彼に許したように、預言者イザヤは、夢の中で罪のために国に起こるべきことを見た。それから歌い始め次のように唱えた。「天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ、主が語られる」(イザヤ書第1章第2節)。「さあ、聞け」彼は言った。「天と地の民よ。神自らが明らかなことばで言った」。「私は子どもを養った」。神は言った。「私は彼らを育てた。しかし、彼らは私を捨て、大いに蔑んだ。彼らは称えるべきことをことばで罵り、守るべきことをことばで捨て去り、外国の習わしを自らの習わしとし、彼らの仕方を捨て去ったのである。それゆえ、私があなた方に言うことは確かである、あなたがたの国は荒廃し、また、あなた方の町は火で燃えてしまうだろう。外国人があなたたちを略奪する。あなた方が祈り、私に叫ぶ時、私はあなた方に耳を傾けない。なぜなら、あなた方は、あまりに邪悪と不正に汚されているからである」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

### 略奪について

「悪人は災いだ」など（イザヤ書第3章第11節）。「邪悪な人に災いあれ」彼は言った。「彼の不正のため、彼の行いの報いを彼は受けるだろう」。「私の民はまた貪欲な略奪者によって略奪される」と彼は言った。「流浪者の略奪は、彼らの家にある。最大の収穫を持つ人に災いあれ」。(p.216) さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

### 高慢について

「シオンの娘たちは高慢で」など（イザヤ書第3章第16節）。「高慢のため、無益に遊び助言に気を留めないあなた方の民を神は略奪し、「あなた方の娘の衣服を豪華な顔隠しを奪う。放縦で自らを飾る彼らの多くは毛を奪われる」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

### 貪欲について

「災いだ、家に家を連れね」(イザヤ書第5章第8節)。彼は言った「家と財産を不正にあらゆる側に置くあなた方に災いあれ」と彼は言った。「あなた方は、自らを支配し、望む限りそのままにいると思うのか？しかし、私が言うことは真実である。あなた方は、予期しない時に、それを捨て去るのである」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

### 大食について

「災いだ、朝早くから濃い酒をあおり」など（イザヤ書第5章第11節）。「時宜に相応しくない食事を愛し、朝早くから過度の飲酒を行い、節度以上でできると傲慢にも考えるあなた方に災いあれ」と彼は言った。「ハーブ、パイプ、さまざまな飲み騒ぎが、宴であなた方を喜ばせる。あなた方は神の美德を全く気に留めることはない。それ故、人々は当然以上に滅びてしまうのである。当然すべきなのに、神の命令を大いに無視し、知恵に

注意を払わない故に、非常に悪くなる」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

#### 欺きについて

「災いだ、自分の目には知者であり」など(イザヤ書第5章第21節)。「自らを賢人とみなし、明らかに欺いていることを知るあなた方に災いあれ。あなた方は、非常にしばし、金銭で不正を助け、購入されない限り、正しさに向かおうとしない」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

#### 不正について

「災いだ、悪を善と言ひ」など(イザヤ書第5章第21節)。「悪を善、善を悪と、苦さを甘さに、甘さを反らし、夜昼、昼の労働を夜に変え、余りにも自らの欲望に従うあなた方に災いあれ」と彼は言った。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

#### 無理解について

「よく聞け、しかし理解するな」(イザヤ書第6章第9節)。「さあ、熱心に聞きなさい。知ってはならない。広く回りを見よ。(p.218) 必要なように、理性で知ろうとするな。当然すべきなのに、今やあなた方は正しさを心の中で持とうとしない」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

#### 頑なさについて

「この民の心をかたくなにし」(イザヤ書第6章第10節)など。「彼らの罪のためにこの民の理解を暗くせよ」と彼は言った。「彼らの町が放棄され、彼らの国が荒廃するまで、彼らが知恵を用意しないように」。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

## 悪法について

「災いだ、偽りの判決を下す者」(イザヤ書第10章第1節)など。「正しさに対して不正を促し、貧しき人の恥辱として悪法を裁き、寡婦と孤児をしばし苦しめる人に災いあれ。それ故、彼は救いを奪われた暗く深い地獄の苦しみの深淵を掻き立てるだろう」と彼は言った。さらに、罪深き国に起こったように、イザヤは言った。

## 過信について

「災いだ、助けを求めてエジプトに下り馬を支えとする者は」(イザヤ書第31章第1節)など。「力に過度の自信を持ち、当然すべきなのに、神に希望を持たず、必要なのに、助けを持たず、必要なのに、それを得ない人に災いあれ」と彼は言った。これらのことを、加えて多くのことを、彼が言ったように、預言者イザヤは預言した。また、それは各々の国の模範として役に立つ。望む人は自らの必要に注意せよ。(p.219) 前述のこれらのことについて、民に聖なる教えを教えた。すなわち、熱心に正しさに向かうことである。また、彼は神のことばで私たちすべてに語りかける。「洗って、清くせよ。悪い行いを私の目の前から取り除け」(イザヤ書第1章第16節)など。全能の神は確かにこのように言った。「身を洗え。私は教える。熱心に清めよ。私の前からあなた方の心の悪い考えを取り除け。悪行を止めよ。善行に留まれ。正しき法、正しき裁きを求めよ。貧しき人を助けよ。孤児と寡婦を守れ。その後、私たちの主は言った。「望むことを私に求めよ。私はあなた方に必要なことを与えよう」。神が私たちを守りますように。アーメン。

## 預言者エレミヤのことば

預言者エレミヤは神の民の必要として熱心に戒めた。それはこのような教えである。「ヤコブの家よ、主の言葉を聞け」(エレミヤ書第2章第4節)など。「神のことばを聞け、さあ、ヤコブの家とイスラエルの家よ」。神

はあなたがたにこれを今尋ね、あなたがたすべてに次のように言われた。「あなたがたの祖先は何を私に見つけたのか？彼らには正しくないように思われた。今や大いに彼らは私から背け、不正に向かい、愚行に従い、不正を愛し、今や長い間彼らは無益となった。それ故、私はあなたに言う、彼は言った。あなた自身の悪行があなたを苦しめ、あなたの背教が、あなたを傷つける。しかし、理性を持って注意し、(p.220) 次のことを熱心に知りなさい。あなたが余りに長く主を見捨て、当然すべきなのに、主への畏れを持たなかったことを。あなたが戻らない限り、辛い報いが起こるだろう」。彼はすぐにその後、慰めのことばですべての人に次のように言った。「背信の子らよ、立ち帰れ、と主は言われる」(エレミヤ書第3章第14節)。「ああ、愛する子供たちよ」、と彼は言った。「帰れ。私は教える。ここに私のところに来い。正しい道を歩め。あなたがたの主を見よ。熱心に行くことがいかに最善か尋ねよ。道に従って行け」。さらに、もし滅ばないことを望むなら、あなた方は守られるだろう。このように、エレミヤは民を教えた。頻繁に彼は熱心に民を戒めた。彼はかつて寺院の門に立ち、公然と言い、次のように語り始めた。「今こそ、お前たちは自分の道と行いを正し、お前たちの神、主の声に聞き従わなければならない」(エレミヤ書第26章第13節)など。「さあ、神のことばを聞きなさい」と彼は言った。「私が教えるように行いなさい。熱心に自らの道すべてと行いすべてを改めなさい。正しさを愛し、不正を避けなさい。もしそのように行い、正しく裁き、不正に苦しまず、貧しき人を困らせず、至るところで無実の人の血を流さず、何よりも、自らの害として異教に注意を払わなければ、私は困難な時にはあなたがたと常にいよう」と彼は言った。「困難な時にはあなたがたを見捨てない」。このように、私たちの主は私たちすべてについて語った。彼が私たちを助け、私たちが彼の御心を用意できるよう私たちに許しを与えますように。アーメン。

## 6. 異教の神々

(p.221) ああ、かつて、悪魔のために、多くのことが誤りに陥り、人類は神に背き、異教が広く私たちを傷つけ、今でも傷つけている。私たちは、ノアの洪水の前に、偶像が世界に至るところで建てられたことを書物で読む。しかし、ノアの洪水の後、ニムロッドと巨人が素晴らしい塔を作り、書物が語るように、働き手の数に従い、非常に多くの言語が生じた。その後、彼らは広く散らばり、人類はすぐに増大した。ついに彼らは、アダムをかつて欺いた古い悪魔に欺かれ、その結果、彼らは愚かにも自らに異教の神を作り出し、彼らを人として創造した真の神と自らの創造主を蔑んだ。悪魔の教えを通して、彼らはそれらを知恵として見なした。彼らは太陽と月をその輝く明るさのために神と見なし、悪魔の教えを通して、ついに、捧げ物を捧げ、彼らを創造した主を捨て去った。輝く星を神であると言い、熱心に崇拜し始めた。彼らの中には、火をその突然の燃焼のために信じるものいた。また、水を信じる人、すべてを養うためにという理由で地を信じる人もいる。(p.222) しかし、もしその意味を知っていれば、彼が人類に与えたその偉大な善良さのため、私たち人間の利益と有用のためにすべてを創造した人こそが真の神である、と彼らは十分に認識することができるだろう。これらの被造物はすべて、彼らに定めたように行い、何も私たちの主の許しなしに行うことはできない。なぜなら、私たちが信じる唯一の真の神を除き他に創造主はなく、私たちは彼だけを何よりも愛し、確かな信仰で崇め、口と心からの信念で、すべてを創造した彼は真の神であると唱えるのである。

異教徒は、以前のように、どんな善良さも保持されないだろう。彼らはさまざまな巨人や世俗の権力によって力強くなり、生きている限りは恐ろしく、欲望に汚れた人たちを崇め始めた。かつて、ある男がクレタと呼ばれる島に暮らしていた。彼はサトゥルヌスと呼ばれた。彼は非常に残酷にも、1人を除き、子供たちを殺した。父親らしからぬ方法で、すぐに若い彼らの命を滅ぼした。しかし、他の兄弟を殺したが、かろうじて1人の子を残した。その子はヨウイスと呼ばれた。彼は恐ろしい悪魔であった。彼はクレタと呼ばれる前述の島から自分の父親を追放し、できるなら、彼を滅ぼすことを望んだ。ヨウイスはかくも邪悪になったので、ユーノーという名の妹と結婚し

た。異教によれば、彼女は崇高な女神と見なされた。彼ら2人の娘はミネル  
ウァとウェヌスであった。私たちが語る邪悪な人たちはその当時神と見なさ  
れていた。(p.223) 悪魔の教えを通して、異教徒は彼らを大いに崇めた。異  
教徒の間で息子は父よりも崇められた。彼はまた異教徒が当時神と見なした  
神のなかでも最も尊敬すべきと見なされている。別の国々で彼は別名トール  
と呼ばれ、デーン人は彼を最も愛し、彼ら異教で最も熱心に崇拝する。彼の  
息子はマルスと呼ばれた。彼は常に争いと災いをもたらし、争いと敵意を頻  
繁に唆す。彼の死後、この哀れな男を異教徒は崇高な神として崇めた。彼ら  
が進軍し、戦いに赴こうとする度に、彼らはこの偽りの神々を称えるために  
捧げ物を備えた。彼らは、戦いで彼が彼らを大いに助けてくれると信じた。  
なぜなら、彼は人生で戦いと争いを愛したからである。この世でメルクリウ  
スと呼ばれた男がいた。彼は、偽りではあるが、非常にことばが巧みで、行  
為と虚偽で欺きを行った。異教徒は自らの判断で、彼を偉大な神として見  
なした。そして、悪魔の教えを通して、道が交わるところで頻繁に彼に捧げ  
物を備えた。しばし、高い山々でさまざまな名誉ある捧げ物が彼に捧げられ  
た。この偽りの神は、当時のすべての異教徒の間で名高かった。彼はデーン  
人によって別名ウォーデンと呼ばれた。さて、デーン人の中には彼ら異教の  
中で、彼らがトールと呼ぶヨウイスは、彼らがウォーデンと呼ぶメルクリウ  
スとの息子であるという。しかし、彼らは正しくない。なぜなら、私たちは  
異教とキリスト教の書物で共に、恐ろしいヨウイスはサトゥルヌスの息子で  
あり、ウェヌスと呼ばれる女性はヨウイスの娘であり、(p.224) 人が言うに  
は、彼女は汚らしく、邪悪で、軽薄にも、悪魔の教えを通して、自らの兄と  
交わりを持った。異教徒はまた邪悪な女性を崇高な少女として崇める。

多くの他の異教の神や女神が、世界中で人類の破滅の元としてさまざまな  
仕方で見受けられる。この世で汚く生きてはいるが、彼らは異教では最上の  
ものと見なされている。人類に対して常に企んでいる狡猾な悪魔は、異教の  
人々を、愚かさに導き、彼らはかくも汚らわしく、自らの欲望を彼らの法と  
して定め、生きている間、淫らさで生涯を送った人たちを彼らの神として選  
んだ。しかし、そのような人たちを蔑み、すべての物を創造した真の神を愛  
し、崇める人は幸いである。全能の神は一人であり、父と子と聖霊の三位一  
体である。三つの名前すべては神聖な力を含み、永遠の神はすべての被造物

の支配者であり創造主である。常に彼に称えと名誉が永遠に常に終わりなく  
ありますように。アーメン。(終)



## 参考文献

- Bethurum, Dorothy. *the Homilies of Wulfstan*. Oxford: Clarendon Press, 1957. Print.
- Dodd, Loring Holmes. *A Glossary of Wulfstan's Homilies*. Yale Studies in English XXXV. New York: Henry Holt and Company, 1908. Print.
- Frankis, Jones. *From Old English to Old Norse: A Study of Old English Texts Translated into Old Norse with an Edition of the English and Norse Versions of Ælfric's De Falsis Diis*. Oxford: the Society for the Study of Medieval Languages and Literature, 2016. Print.
- Lionarons, Joyce Tally. *The Homiletic Writing of Archbishop Wulfstan*. Woodbridge: D.S. Brewer, 2010. Print.
- Napier, A.S. *Wulfstan: Sammlung der ihm zugeschriebenen Homilien nebst Untersuchungen über ihre Echtheit*. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1883. Print.
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』東京：日本聖書協会，1995. Print.